平成５年度

掛川市埋蔵文化財発掘調査年報

１９９４

掛川市教育委員会

例　言

1．本書は、平成５年度に掛川市内で実施した発掘調査の概要を紹介するためにまとめたものである。
2．報告文は発掘調査担当が行った。なお、調査の実施機関が掛川市教育委員会以外のものは、編集を担当した井村が執筆した。
3．本書に掲載した発掘調査の内容は、今後整理調査を進める中で変更が出てくる可能性がある。
4．調査によって得た調査資料は、すべて掛川市教育委員会が保管している。

凡　例

1．調査地を表す位置図は、２万５千分の１の地形図とそれを掛川市全図にあてはめたものの２つで表している。

目　　次

例言

凡例

1．発掘調査の概要

①掛　川　城 …… 1

②掛川城大手門跡 …… 2

③高 田 遺 跡 …… 4

④堀ノ内横穴群 …… 8

⑤大谷古墳群 …… 10

⑥中原、高田上ノ段遺跡 …… 12

⑦柿ケ谷遺跡 …… 13

⑧向 山 遺 跡 …… 14

⑨曽我後遺跡 …… 16

⑩大六山遺跡 …… 18

2．確認調査一覧表 …… 19

①掛川城

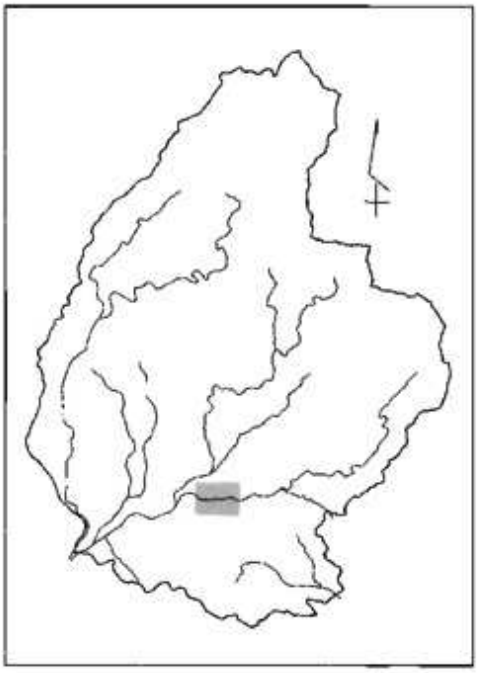
調査地　掛川市1.138－24外

調査目的　掛川城公園整備に先立つ発掘調査

調査期間　平成５年４月～平成６年３月

調査面積　7,000㎡

調査主体　掛川市教育委員会



調査概要

１．遺跡の位置、立地

掛川城は市内の南部、市街地のある平野部に位置する。標高57m、平野部との比高差は約30mの丘陵に占拠する。

２．調査の成果

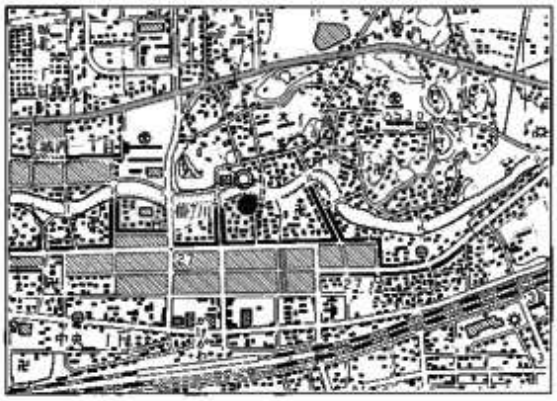
今年度は、十露盤堀、三日月堀、内堀の調査を行った。

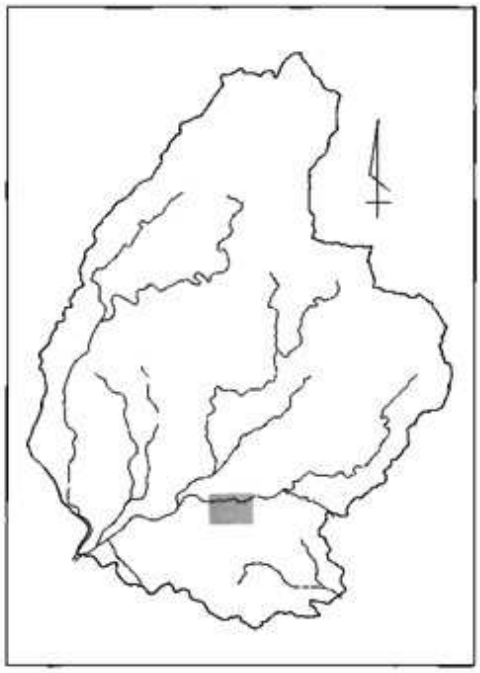
十露盤堀は、南肩と西肩を確認した。すべてを掘ることはできなかったが、トレンチ調査によりかなり広範囲に延びていることがわかった。堀の外側は不定形だが、内部は幅広の畝によって仕切られ、南北方向に長い箱堀が２本設けられていた。また、本丸の排水は、地下に埋設された暗渠を流れ、十露盤堀に集められ、そこで一定の水位に達すると暗渠を経て、内堀へ流れるしくみとなっていた。

三日月堀は本丸門の全面に配された三日月状の水堀である。長さ30m、最大幅19m、最深部５m、壁面はかなりの急勾配であった。堀の南側には、犬走りが設けられ、石垣の根石部分を確認した。石垣の下には、直径40～60cm、深さ60～ 100cmのピット列が検出された。ピット内から杭材が出土している。柵などの守城施設があったと考えられる。十露盤堀、三日月堀、内堀の３つはすべて暗渠によってつながっており、水位調節が行われていたことがわかった。　（戸塚和美）

②掛川城大手門

調 査 地　掛川市1,135－3外
調査目的　掛川駅北土地区画整理事業に先立つ発掘調査
調査期間　平成５年４月22日～平成６年３月
調査面積　340㎡
調査主体　掛川市教育委員会





調査概要

１．遺跡の位置、立地

大手門跡は、木の香りが残る大守閣から望み、南東約 300mの大手町と呼ばれる地域に位置している。城下風町づくりが進み、ここ数年で町の様相は変化してきている。しかし連雀通りを北に折れ、大手橋を南から渡る┌状の道の曲がりは、江戸時代の面影を残している。

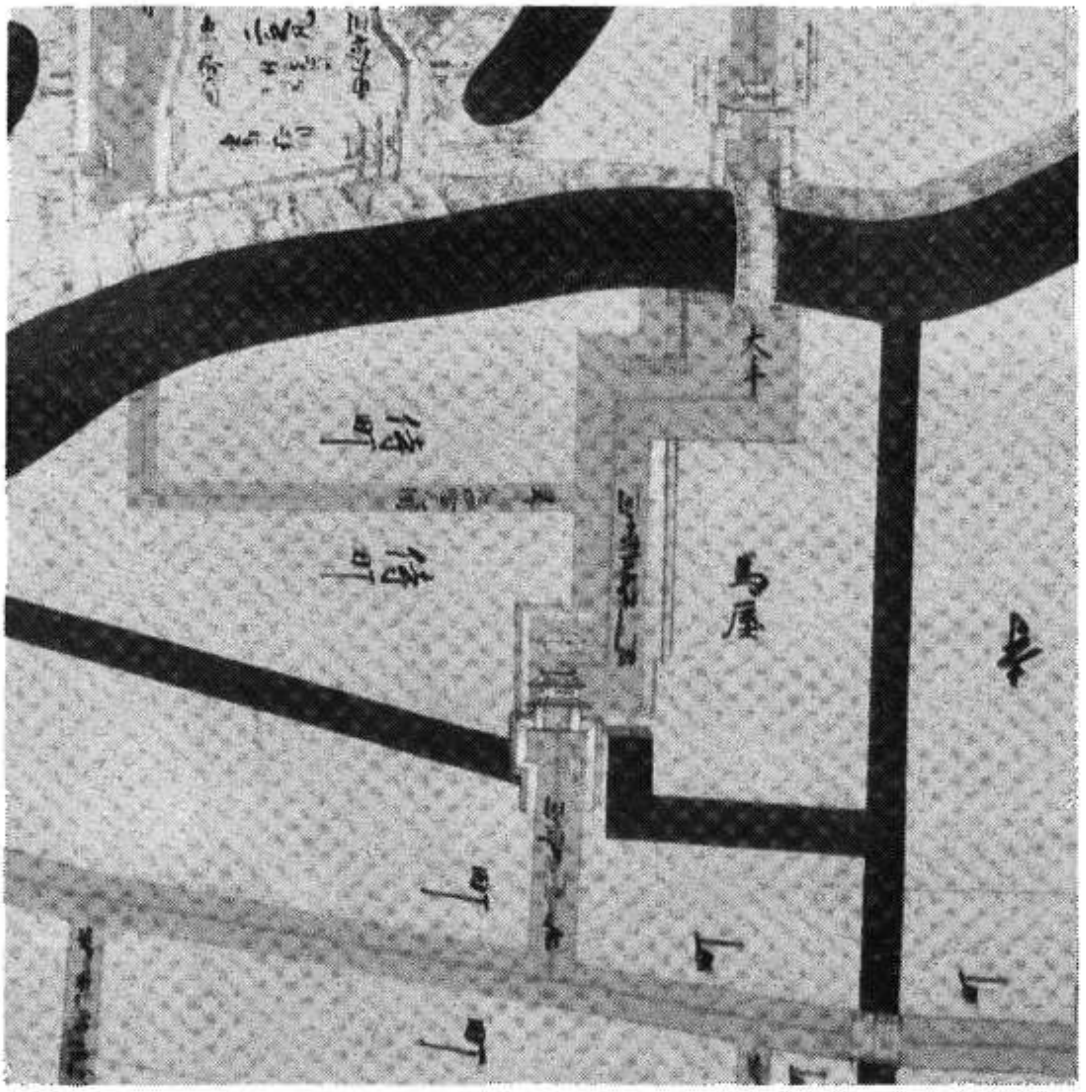
２．調査の成果

平成４年度、５年度と調査を行った結果、大手門の規模を確認することができた。平成４年度の調査により、「正保城絵図」に描かれているように、大手門があり、土塀、番所小屋が存在したことがわかった。５年度では、前回の調査区の東側を調査することにより、大手門の規模、そして門の東側にも土塀石垣が存在したことがわかった。大手門の規模は、桁行７間(約12.72m)、梁間３間（5.45m)である。大手二之門といわれる油山寺山門（袋井市）は、５間×２間半であり、大手門のほうが大きいことが確認できた。また、根固め石の配置から、正面に向かって、左側に脇扉がつけられていたことがわかる。

また、大手門の東側の部分の調査も行った。大手門の礎石根固めに比べ、小規模な根固めを幾つか確認した。この根固めは、直径50cmの穴に10cm大の石が積まれていた。このような根固め石が並んでいることから、建物の存在がうかがえる。やはり、

この周囲は地盤が弱いため、建物には簡単な基礎をほどこしていたことが確認できた。

（井村広巳）



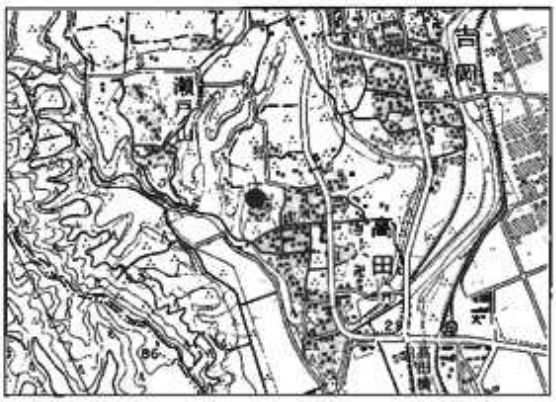
正保城絵図（大手門周辺）　（内閣文庫蔵）

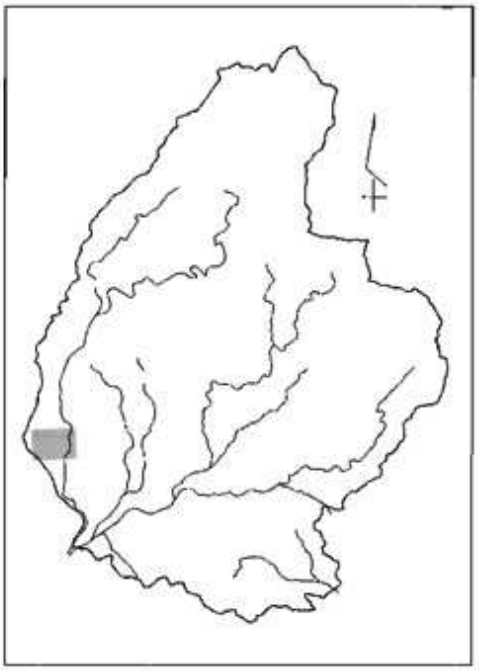
東側礎石根固め石列

礎石根固め石

③高田遺跡

調 査 地　掛川市高田1,296
調査目的　茶園改植に先立つ発掘調査
調査期間　平成５年８月25日～平成６年３月25日
調査面積　1,410㎡
調査主体　掛川市教育委員会





調査の概要

１．遺跡の位置、立地

高田遺跡は、掛川市の南西部に広がる和田岡原に存在する。和田岡原は、原野谷川が形成した段丘で、市内でも遺跡が集中する地域である。和田岡原は、標高60m前後の上位段丘面と標高40～50m前後の下位段丘面に区分されるが、高田遺跡はその下位段丘面に位置する。段丘は、南西部に開析がみられ、小さな谷が入り組んでいる。今回の調査地点は、この小さな谷を間近にした段丘の縁辺部にあたる。

２．調査の成果

高田遺跡は、これまで何度か発掘調査が行われており、その結果から弥生時代後期から古墳時代前期の集落跡であることがわかっている。今回の調査でも、多くの住居跡を確認することができた。

この時期の竪穴住居跡を、43軒確認した。しかし炉が、単独で検出されており、掘り方は確認できなかったが、さらに多くの竪穴住居跡が存在したと思われる。住居跡は、１辺が３～５mの隅丸方形で、壁溝を巡らすものが多い。検出したすべての住居跡が切り合いをもち、建て替えが何度かおこなわれたことがうかがえる。図示した土器は、ＳＢ01、02上面から出土したものである。土器は、廃棄されたかのようにすべて破片であり、拳大の石が混じっていた。

掘立柱建物は、６棟確認した。１間×１間が１棟、１間×２間が４棟、１間×３間

が1棟である。東西方向に棟をもつSH01、04、南北方向に棟をもつSH03、05、06の2群に分かれる。

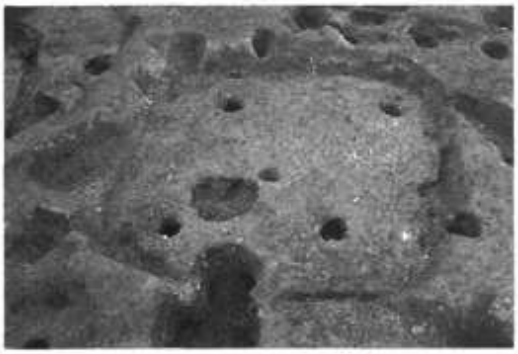
その他の時期では、縄文時代中期中葉の土器を出土するピットを検出した。遺構を検出する際にも縄文土器を数点確認している。また遺構は確認できなかったが、F・G－4区に広がるSB38の検出面から、古墳時代中期（5世紀末）の須恵器の甕が出土した。（井村広巳）

縄文土器出土状態

重なり合う竪穴住居

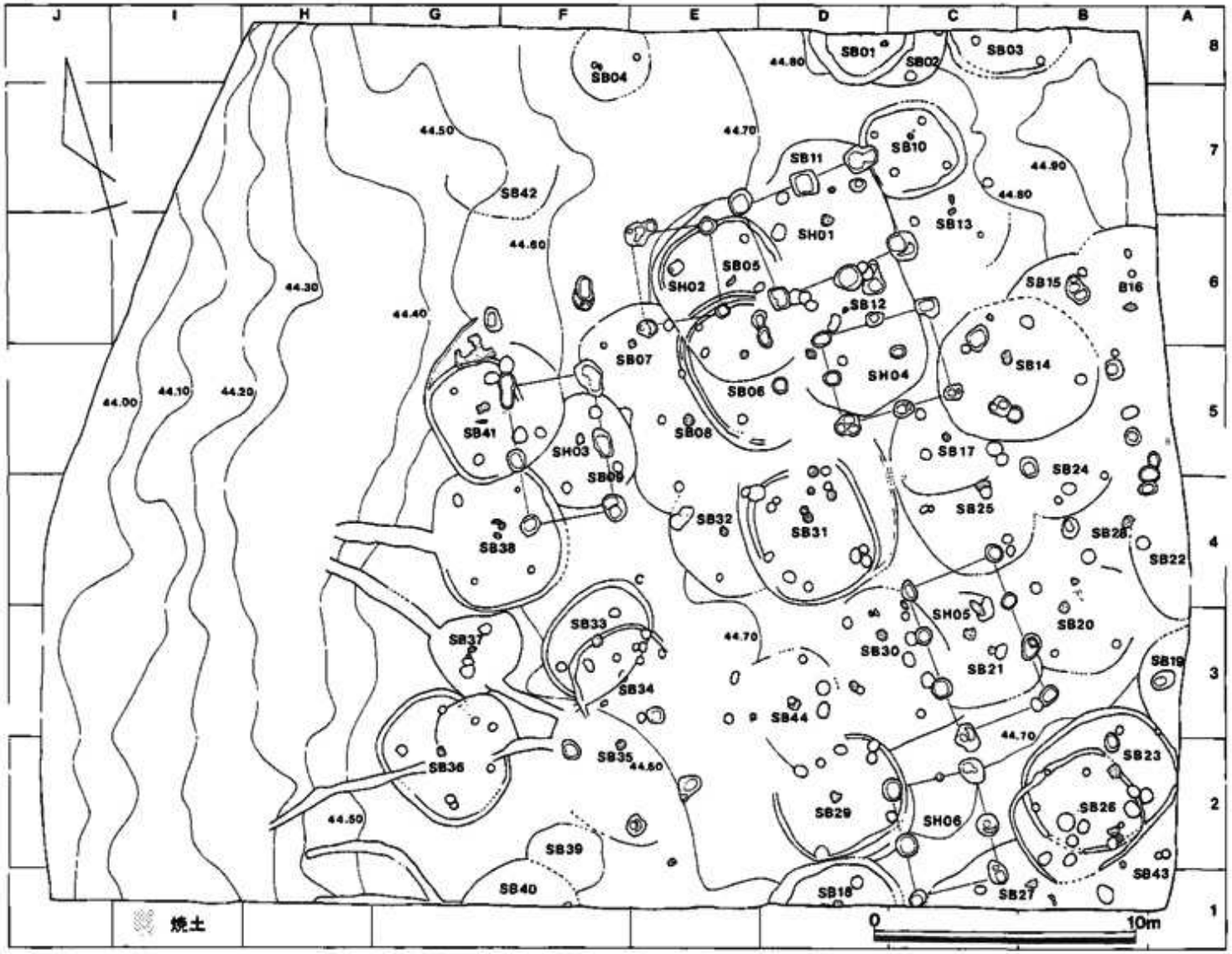
弥生土器出土状態

廃棄された土器

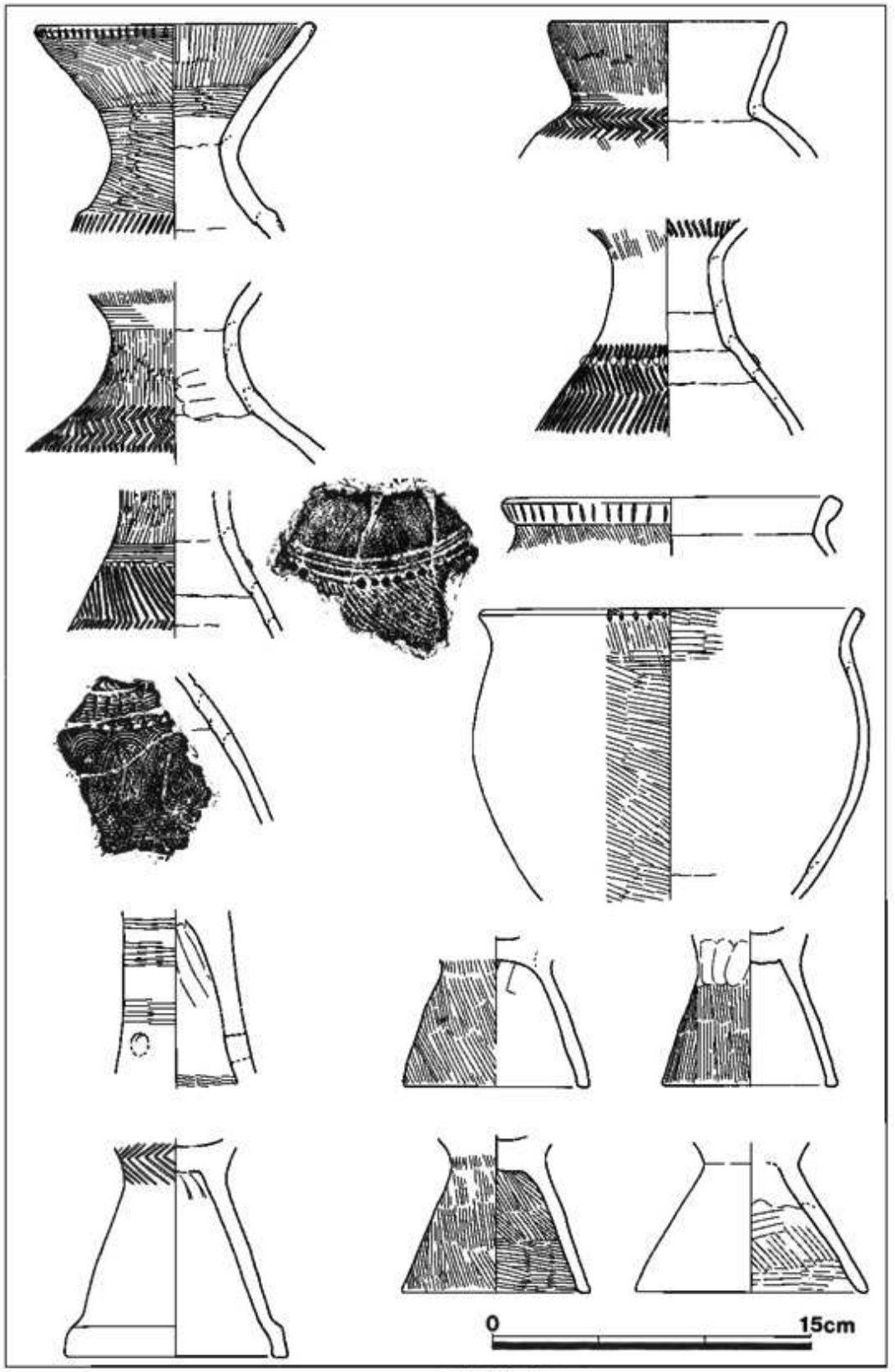


古墳時代前紀　竪穴住居

掘立柱建物跡



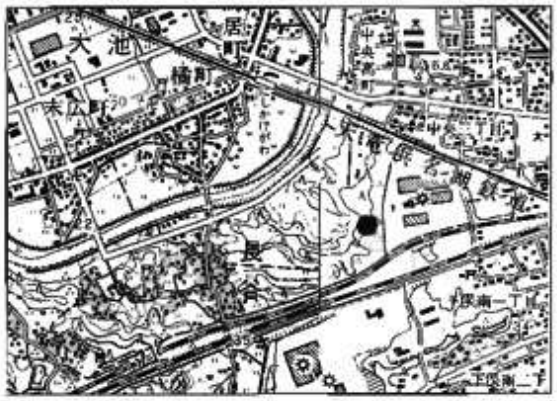
弥生時代後期～古墳時代前期住居跡配置図

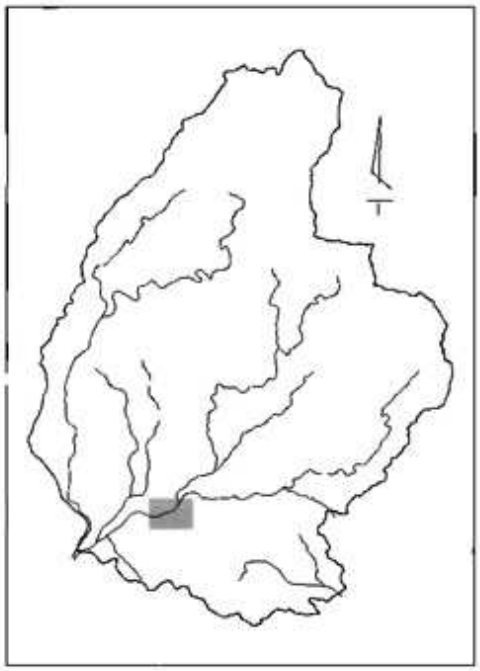


SB01・02出土遺物実測図

④堀ノ内横穴群

調 査 地　掛川市長谷775
調査目的　新市庁舎等建設に先立つ発掘調査
調査期間　平成５年９月～平成５年10月
調査面積　5,000㎡
調査主体　掛川市教育委員会





調査の概要

１．遺跡の位置、立地

堀ノ内横穴群は、市街地から西へ約２㎞の市役所建設予定地である長谷丘陵に位置する。長谷丘陵は、小笠山丘陵の北麓にあたり、丘陵の北には逆川が流れ、沖積地を形成している。この地域には、金銅装の馬具を出土した山麓山横穴、県内最大規模の玄室に造り付けの石棺をもち、手の込んだ装飾が施された大刀が出土した宇洞ケ谷横穴、横穴式木芯粘土室の構造をもち、銅鏡、馬具などを出土した堀ノ内13号墳など、優れた副葬品をもつ横穴や古墳が発見されている。

２．調査の成果

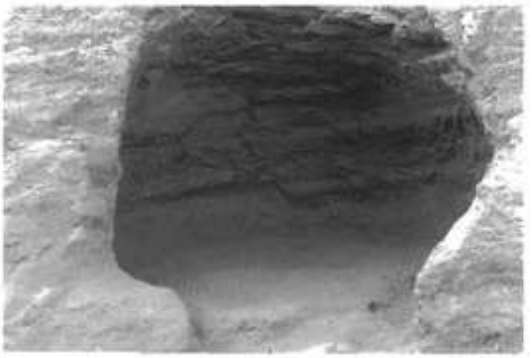
堀ノ内横穴群は平成３年度より調査が行われている。今回は５基の横穴墓を発見した。そのうち３基は並んで造られ、２基は別の丘陵斜面に各々単独で造られていた。閉塞石が残っているものはなく、天井が崩落しているものもあった。形状は、５基すべてドーム形である。玄室内からは土師器、須恵器、鉄鏃、玉類が出土している。

（大熊茂広）

横穴墓の入口

排水溝をもつ横穴

玄室内遺物出土状態
（須恵器・人骨・鉄鏃）

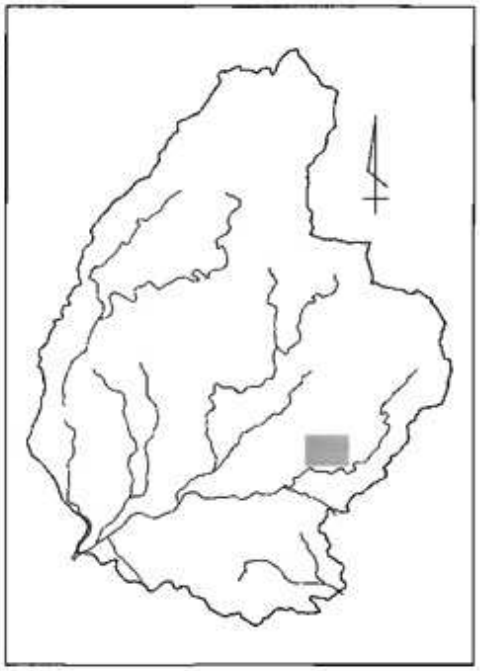


完掘状態

玄室内遺物出土状態

⑤大谷古墳群（おおたにこふんぐん）

調 査 地　掛川市千羽1.290－2外
調査目的　工場建設用地造成に先立つ発掘調査
調査期間　平成５年７月～平成５年８月
調査面積　640㎡
調査主体　掛川市教育委員会



調査の概要

１．遺跡の位置、立地

大谷古墳群は、中心市街地から東へ約４km、国道１号線より北へ約 0.5kmに位置する。掛川市の南部を東西に流れる逆川の支流、千羽川と木割川により開析された丘陵尾根上に立地する。開析谷を挟んだ西側の丘陵地には工業団地エコポリスがある。遺跡地の南側の斜面には大谷横穴群が存在している。

２．調査の成果

今回の工事が計画された場所には、大谷横穴群を含む12地点に埋蔵文化財の存在が予想され、まず、確認調査を行った。その結果、本調査は埋蔵文化財が存在し、破壊を免れないNo１・３・７の３地点について行われた。

No１地点からは、長径1.8m、短径1.4mの土壙を１つ検出した。底部に穿孔された弥生時代後期の壺が、粉々になった状態で発見されている。No３地点は、No１地点と隣接するこぶ状の高まりである。高まりを挟むように、西側の裾部と東側の尾根上には、尾根に直交する溝２本を発見した。土師器片がわずかに出土している。また、尾根頂上部から古墳時代初頭の土師器高坏が出土した。当初２本の溝があることから古墳と考えていたが、主体部が検出されなかったことから、疑問である。No７地点はNo３地点から尾根づたいに50m程北方に位置する。No７地点からは、尾根上から性格不明の石製品と管玉２点が出土した。いずれも滑石製である。石製品は破損しているが、

焼津市小深田遺跡の住居跡から出土した石製品と類似している。出土遺物は少ないが、この地点が弥生時代後期から古墳時代前期にかけて祭祀の場となっていたと考えられる。（大熊茂広）

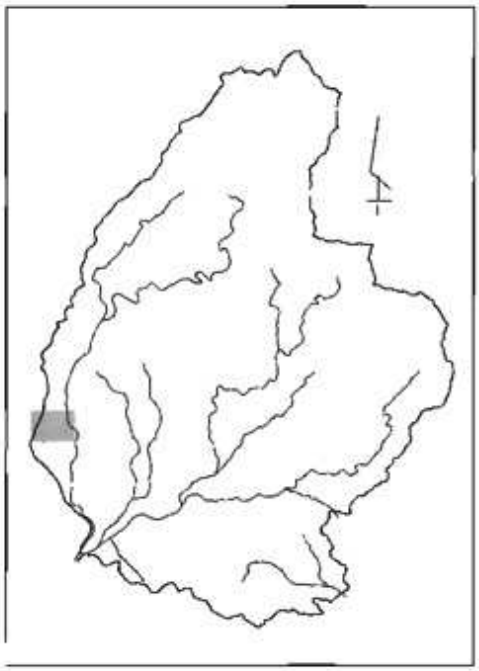
調査図全景

No 3 地点を区画する溝

No 7 地点出土装身具

⑥中原、高田上ノ段遺跡

調 査 地　掛川市高田892－1外
調査目的　市道、農道改良工事に先立つ発掘調査
調査期間　平成５年５月～平成５年７月
　　平成５年12月
調査面積　2,046㎡
調査主体　掛川市教育委員会



調査の概要

１．調査の位置、立地

中原遺跡、高田上ノ段遺跡は、掛川市の西方を流れる原野谷川が形成した段丘上に位置する。この段丘は、和田岡原と呼ばれ、縄文時代から古墳時代前期にかけての遺跡が数多く分布している。古墳時代中期の大型古墳も分布しており、高田上ノ段遺跡内には、全長55mの前方後円墳、吉岡大塚古墳が存在している。段丘は、２段に区分されるが、遺跡が位置する標高60m前後は上位段丘面にあたる。

２．調査の成果

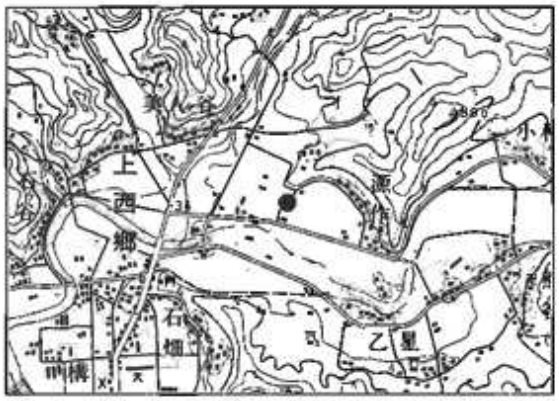
調査は、道路拡幅に伴うものであるため、現道に沿って幅約１mと細長く行われた。遺構は、縄文時代中期の竪穴住居８軒、時期不明の竪穴住居２軒、溝状遺構23本、小穴多数を確認した。

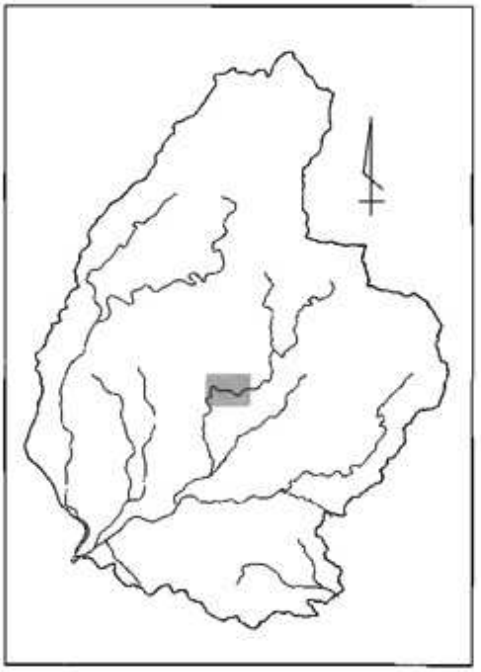
（大熊茂広）

縄文中期の竪穴式住居

⑦柿ケ谷遺跡

調 査 地　掛川市上西郷4,208外
調査目的　市道拡幅工事に先立つ発掘調査
調査期間　平成６年１月10日～平成６年１月17日
調査面積　92㎡
調査主体　掛川市教育委員会





調査の概要

１．遺跡の位置、立地

柿ケ谷遺跡は、市街地から北へおよそ５kmほど行った旧三笠中学校周辺に広がる遺跡で、縄文時代中期（約4,000年前）を中心に営まれたムラの跡（集落跡）である。遺跡は、倉真川と滝ノ谷川の合流する地点に立地しており、川魚を漁獲しやすい場所であったと思われる。また、立地地形をみると、遺跡は倉真川がえぐり取った低い段丘上にあることがわかる。

出土遺物

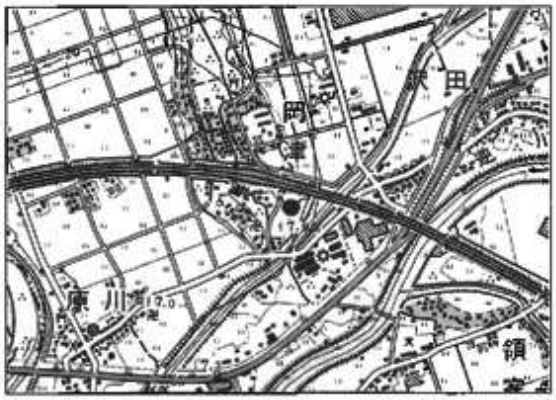
２．調査の成果

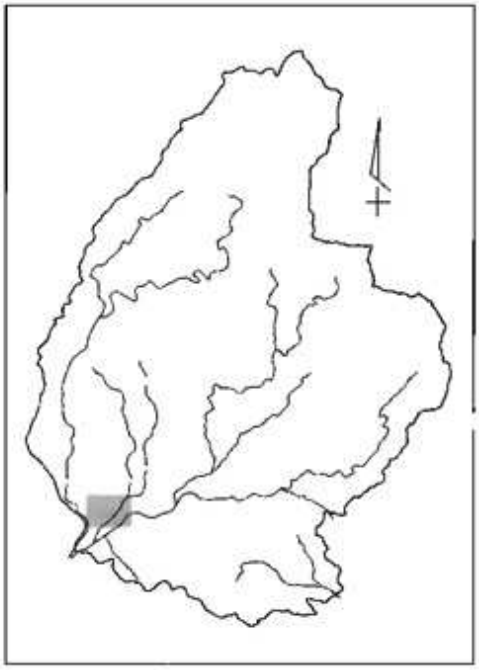
調査は、拡幅される道路部分の狭い範囲での調査であった。調査では、当時の人々が築いた建物の跡などはいっさい発見しなかったが、調査区北寄りで東の倉真川旧河道に向かって広がる小谷地形を発見した。その谷地形の奥詰まった部分から、縄文時代中期後半の土器が数点出土した。具体的な集落の景観は確認できなかったが、平成４年度の発掘調査で確認した状況から、柿ケ谷遺跡は本地点の東の限界として西北方向に広がりを持つものと思われる。

（松本一男）

⑧向山遺跡

調 査 地　掛川市岡津字向山
調査目的　工場用地造成に先立つ発掘調査
調査期間　平成５年６月～平成６年１月
調査面積　2,700㎡
調査主体　掛川市教育委員会
実施期間　静岡人類史研究所





調査の概要

１．調査の位置、立地

向山遺跡は、掛川市の南西部、原野谷川が形成した河岸段丘である岡津原の南端に位置する。岡津原は、北西に広がる和田岡原同様、遺跡が密に分布する地域であるが、あまり調査が行われておらず、その性格は不明な部分が多い。

２．調査の成果

調査では、弥生時代中期から後期の方形周溝墓３基、古墳時代の墓（土壙墓）１基、掘立柱建物１棟、江戸時代の墓24基、蔵骨器２基、他に溝、小穴を確認した。

方形周溝墓は、主体部（遺体埋葬部）を確認したものもあった。３号墓の溝から弥生時代中期の土器が、また２号墓の主体部付近から弥生時代後期の土器が出土している。これらのことから、発見された方形周溝墓は弥生時代中期から後期に属するものと考えられる。

江戸時代の墓は、全部で24基発見したが、これらは２つのタイプに分かれる。１つは、遺体をそのまま埋葬したもの（土壙墓）で、12基確認した。穴からは、かわらけ、陶器、寛永通寶などの銭貨、鉄釘、そして人骨が残るものもあった。もう一つは、土壙内で遺体を火葬したもの（荼毘墓）で12基確認した。副葬品は、土壙墓とほぼ同じであるが、玉石、鉄剣片が出土した。これらの墓は、土壙墓は斜面地に、そして荼毘墓は平坦面に作られており、場所の区別を行っている。

以上のことから、向山遺跡は、時代を跨り墓地空間として機能していたと考えられる。

調査区全景

方形周溝墓

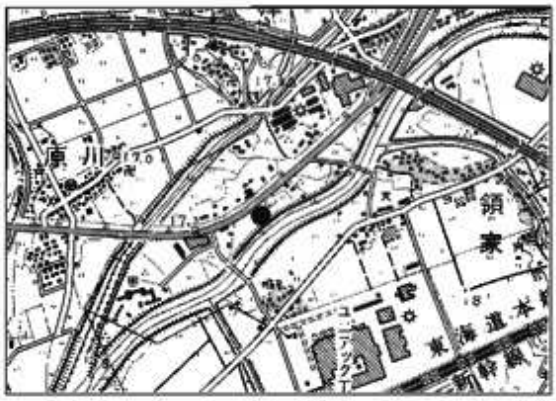
弥生土器出土状態

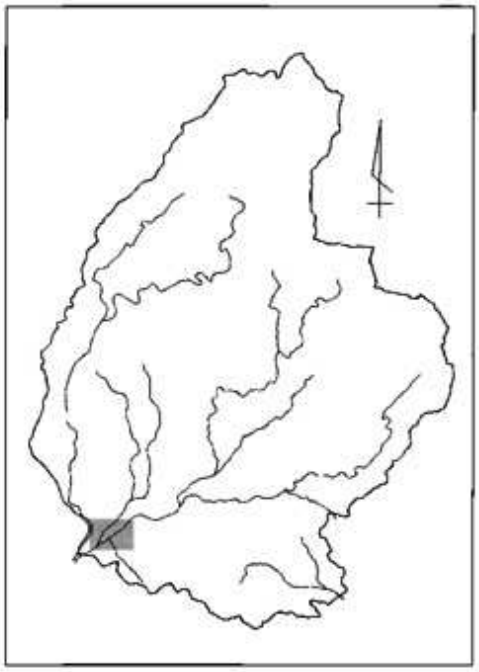
土壙墓

蔵骨器

⑨曽我後遺跡

調 査 地　掛川市岡津字伊達方下辻171－1
調査目的　ボーリング場建設に先立つ発掘調査
調査期間　平成５年９月28日～平成６年１月20日
調査面積　745㎡
調査主体　掛川市教育委員会
実施機関　静岡人類史研究所





調査の概要

１．遺跡の位置、立地

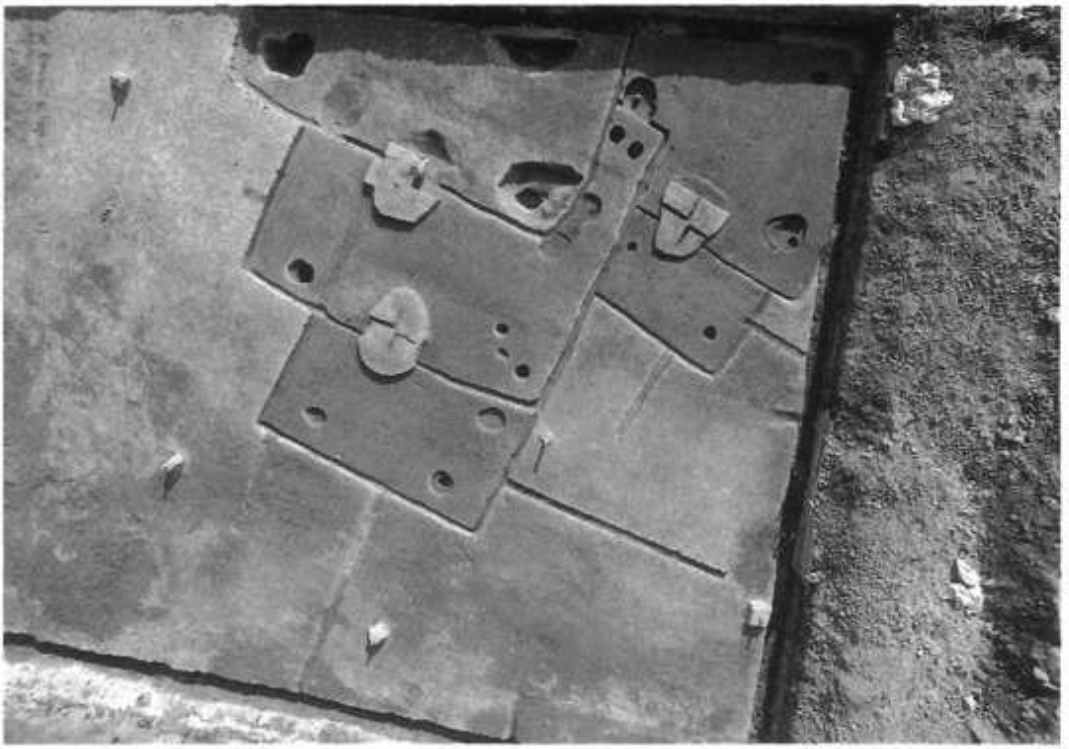
曽我後遺跡は、掛川市南西部の垂木川と逆川にはさまれた低地、中州状の微高地に立地している。この低地周辺には、原川遺跡をはじめ数多くの遺跡が所在し、弥生時代から近世にかけて長い間の生活の跡をうかがうことができる。

２．調査の成果

調査では、弥生時代中期後半から後期にかけて存在した溝と、古墳時代後期の竪穴住居跡12軒、溝、小穴、そして奈良・平安時代の溝、土坑を確認した。

溝は、２条が旧河川と考えられる。形状が蛇行しており、溝内からは弥生時代中期から後期、古墳時代中期の土器が出土した。古墳時代の土器は、高坏、手づくね、小型壺が出土しており、祭祀に関連するものが多い。

古墳時代後期の住居跡は、分布から３群に分けられる。調査区西側に６軒、中央に４軒、東側に２軒ずつ、重なりあっていた。そしてほとんどが北西の位置にカマドを持っている。そして、住居跡からは、須恵器の坏身、坏蓋、土師器の甕・甑・高坏・壺などが多数出土した。調査で検出された建物跡等の状況から、曽我後遺跡は南東へ広るものと考えられる。



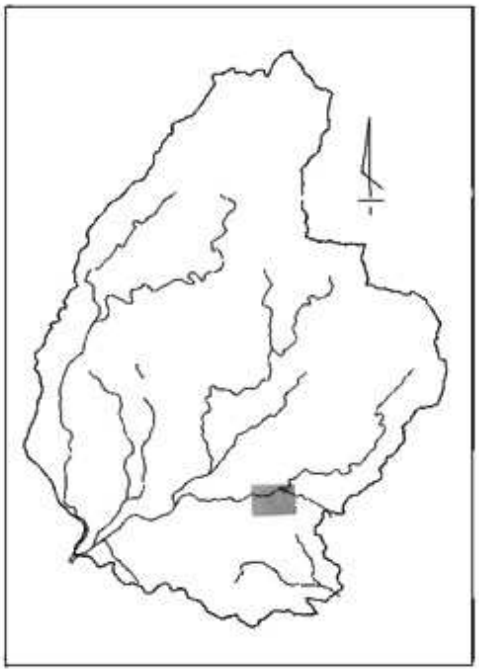
調査区西側竪穴住居跡群

竪穴住居跡完掘

住居跡内土器出土状態

⑩大六山遺跡

調 査 地　掛川市葛川字大福寺790
調査目的　宅地造成工事に先立つ発掘調査
調査期間　平成５年７月28日～平成５年10月28日
調査面積　2,250㎡
調査主体　掛川市教育委員会
実施機関　加藤学園考古学研究所



調査の概要

１．遺跡の位置、立地

大六山遺跡は、掛川駅より東へ1.6km行った丘陵地の北端部分に立地し、その丘陵の南向きの緩やかな傾斜地に広がっている。

２．調査の成果

調査では、竪穴住居跡を22軒と鎌倉時代の建物跡を確認した。検出した竪穴住居は、弥生時代のものが２軒、古墳時代後期のものが20軒であった。古墳時代後期の竪穴住居は重なり合うものが多く、２～３回にわたって建て直されていることがわかった。どの住居跡も、北側にカマドをもっていた。住居内からは、甕、甑などの土器が出土している。住居跡の状況から、古代において既に丘陵斜面を切り開き、平坦面を作りながら、住居を建てていたことがわかる。

その他、珪質頁岩、チャートの石材や一部加工品が発見されており、縄文土器も出土している。これらから、縄文時代にもこの地に人間の動きがあったことがわかった。

古墳時代住居跡　遺物出土状態

確認調査一覧表

遺跡名	調査地	開発事業内容	調査面積(㎡)
原川遺跡	掛川市徳泉57-1	市道改良	50（トレンチ）
細田遺跡	掛川市細田253-1外	工場敷地造成	90
西田遺跡	掛川市葛川1177-1外	店舗敷地造成	124（トレンチ）
山口遺跡	掛川市成滝608-1外	貸駐車場建設	81
篠場遺跡	掛川市梅橋339-1外	店舗敷地造成	99
篠場遺跡	掛川市篠場210外	社屋の拡張造成	36
下西郷遺跡	掛川市城西2-1826-2外	分譲宅地造成	108
細田遺跡	掛川市細田211	駐車場建設	27
細田遺跡	掛川市細田213	駐車場建設	54
堂下遺跡	掛川市逆川240-26	貸倉庫建設	36
大池遺跡	掛川市大池812-1外	貸倉庫建設	36
小山平Ⅲ遺跡	掛川市下垂木2892-3外	農地改良	80(トレンチ)
加島遺跡	掛川市上西郷236-1外	貸店舗建設	54
会ケ前遺跡	掛川市上垂木36-1外	園芸場建設	45
中下遺跡	掛川市上西郷1753	賃貸住宅敷地造成	18
掛川城址	掛川市掛川1167-1外	駐車場整備	269
瀬戸山Ⅰ遺跡	掛川市高田747-1	防火水槽埋設	70

平成５年度
掛川市埋蔵文化財発掘調査年報

１９９４

編集発行　掛川市教育委員会
　　掛川市長谷701－1
印　　刷　株式会社　彩光堂
　　掛川市宮脇248－1